

無教会主義の前進

内村鑑三

無教会は進んで有教会となるべきである。しかし在来の教会に還(かえ)るべきでない。教会ならざる教会となるべきである。すなわち教会を要せざる者の霊的団体となるべきである。かかる団体が直ちにまた教会となりやすきは、余輩の充分に認むるところである。しかしその場合においてはまた直ちにこれをこぼつべきである。教会は生物の体駆(からだ)とひとしく、永久にこぼちて永久に築くべきものである。教会もまた生物とひとしく、その恐るるところは結晶である。無教会主義はその一面においては、結晶せる教会の破壊である。他の一面においては、生ける教会の建設である。そうして無教会が結晶してまたいわゆる教会となる時には、無教会主義をもつてまたこれをこぼつべきである。キリストの王国はかくのごとくにして発達する。余輩は安心して大胆に進むべきである。

そうは言え、無教会主義もまたセントルマン的でなければならぬ。彼は在来の教会の自由と平和とを妨げてはならない。ゆえに彼はその道を教会内に

説いてはならない。彼はパウロのごとくに異邦人の中に行くべきである(使徒行伝一八・六)。そうしてもし教会を建つるの必要があるならば、彼ら無教会信者の中に建つべきである。

無教会主義はまた教会内の不平家を糾合(きゆうごう)せんことを努めてはならない。彼は全く教会を離れて働くべきである。教会と関係ある者、または、ありし者は、なるべく避くべきである。日本国内にまだ福音を信ぜざる者は数千万人ある。少数のキリスト信者を誘うてわが味方となす必要は毫(ごう)もない。われらは純粋の不信者をわが味方となすべきである。われらは進んで心靈界の叢林(そうりん)に入って、その獅子(しし)と虎とを捕うべきである。教会の庭園に入って、その馴(な)れたる鹿や羊を盗むべきではない。

余輩はすべての、キリストを愛する者を尊敬する。しかしながら今の教会に關連して余輩の手と足をまとわるるを好まない。余輩は福音の急先鋒ならんと欲する。ゆえに監督制度や憲法政治の束縛を離れて自由の活動を許されたく思う。余輩は彼らを妨げない。ゆえに彼らに妨げられたくない。余輩はまた今日まで彼らの援助を乞(こ)わざりしごとく、

今後もまた彼らにたよるまいと思う。余輩は天国において彼らと共にありたく思うなれども、しかし、この世においては彼らと離れておることを望む。これ余輩に寛容の精神が足りないからではない。福音のためである。聖書にいわく、

聖霊言いはけるは、わがためにバルナバとサウロを選び別ちて、わが彼らに命ぜしところの事を
おとなわしめよ(使徒行伝一三・二)

と。分離は必ずしも悪いことではない。主のためにすればはなはだ善いことである。

無教会主義であればとて決して放埒(ほうらつ)に流れてはならない。われらは外形の儀式はこれを軽んずるも、福音の精要には固くするべきである。われらはいわゆる正統教会とは何の関係も持たないが、しかし「聖徒に一たび伝えられし信仰の道のためには力を尽くして戦わん事」(ユダ書二)を欲する。余輩は自由を重んずるが、ユニテリアン主義を取らない。常識を貴ぶが、肉体復活の信仰を捨てない。余輩はでき得るだけ新約聖書をそのままに実行せんと欲する。

余輩の行為を単独突飛の行為と見なす者はまちがっておる。余輩の同志はわが日本国に多くあるば

かりではない、外国にも少なくない。ことにデンマーク国有名の思想家ゼーレン・キルケゴールのときは余輩の先導者と称すべき者である。彼がいかなる人物であるか、彼の信仰はいかなるものであるかは、余輩の友人W・グンデルト氏によりて、遠からずして本誌の読者に紹介せられるであろう。デンマーク国は小国であるなど言いて、決して侮るべきではない。大なる思想は常に小なる国より出で来る。キリスト教を産みしユダヤは小国であった。西洋文明を産みしギリシャも小国であった。余輩近ごろ神の導きによりてデンマーク国と少しく縁を結ぶに至つて、その、心霊的にははるかに大米国以上の国であることを発見した。彼キルケゴールの言のときは大いに余輩を励ますものである。

いざ来たれ、わが信仰の友よ、立つて今より後また進まんかな。松のこずえに奏(かな)ずる風をわが音楽となし、茂れる森をわが祈禱の座と定め、罪人をわが友となし、愛に縛らるるのほか、何ものにも縛られずして、広き世界に自由の福音を宣(の)べ伝えんかな。

(一九〇七年三月『聖書之研究』)

無教会主義を捨てず

内村鑑三

私の家に大なる悲痛が臨みました(注)。しかしながら私はある人々が言い触らしますように、それのために無教会主義を捨てません。無教会主義とは言うまでもなく聖徒の交際を絶つことではありません。宗教の名をもつて立つところのこの世の制度の不要有害を唱うる主義であります。しかして、いわゆるキリスト教会なるものの中よりこの世の精神が全く絶たるるまでは、この主義を唱うるの必要があるのであります。ある明白なる意味において、昔時(むかし)の預言者らは無教会主義者であつたのであります。イエスは当時(そのとき)の無教会主義者でありたまいしゆえに、パリサイの人、サドカイの人などという、時の教会信者らに十字架につけられたもうたのであります。革命当初のルーテルは確かに激烈なる無教会主義者でありました。彼は周囲の事情にせまられて、ついにローマ天主教会に劣らざる教条(ドグマ)的教会を作らざるを得ざるに至つて、ここに悲しむべくも彼の当初の革命の精神は消えてし

まつたのであります。ウエスレーは終生、自分は英国聖公会の正会員であると言いましたが、しかし聖公会は今に至るも彼をその謀叛人(むほんにん)と認め、地上唯一の歴史的正教会を無視した者であると唱えております。近世に至りて、稀有(けう)の哲学者にして熱誠のキリスト信者なりしデンマーク国のゼーレル・キルケゴールが、彼の鉄槌(てつづい)を北欧のルーテル教会に加えてより、無教会主義は古代の預言者の熱烈をもつて信者の迷夢をさましたのであります。私は重ねてここに白(もう)します、無教会主義は不肖私が初めてこの国において唱えた主義ではありません。これはイザヤ、エレミヤらをもつて始まり、今になお多くの正直なるキリスト信者らによりて、いだかれ、かつまた唱えらるる主義であります。

かく申して、私は今のキリスト教会の中に一人の善人、一人の真正(ほんとう)の信者がおらないと言うのではありません。多くの善き人、多くの義(ただ)しき人のその中におけることは、私の充分に認むるところであります。しかしてまたその中の少なからざる人々を私の友人と称することのできるのを、私は喜びまた感謝する者であります。しかしなが

ら、主義は主義であります。これは私交のゆえをもつて変うることのできるものではありません。私がルーテルやキルケゴールに従い教会制度を攻撃しますことは、これ教籍を教会に置く人々に人身攻撃を加えることではありません。私は今のいわゆる教会なるものに制度(システム)として反対するのであります。しかして私のこの反対に同情せらるる者の、教会の中にもあることは、否むべからざる事実であります。その事は、常に無教会主義を唱えて変わらざるこの「聖書之研究」が、その発刊当時より、諸教会の多くの信者教師たちによりて、少なからざる同情をもつて読まれ来たりしことによりてわかります。

もちろん悪しき制度は悪しき人を生みます。しかして今の教会なるものが多くの悪人の隠匿場(かくれば)となりておることは、私ならで教会内の有識者の充分に認むるところであります。しかして彼らと私と説を異にする点は、私は

鼠族(そぞく)の跋扈(ばつこ)する納屋(なや)はこれを焼き払うに若(し)かず

と言うに對して、彼らは

否よ、しかなすべからず。鼠族はこれを除けば足る。されども納屋はそのまま乙れを保存すべし

と言うのであります。問題はつまるところは洗清実行の問題であります。信仰の根本にかかわる問題ではありません。すこぶる重要な問題ではありませんが、しかし、福音の死活にかかわる問題ではありません。

かく言いて、私はこの際、婿(こび)を教会に送りてその同情を求めんと欲するではありません。私は私が今日有する以上に友人も同情者もいません。もし教会が無教会主義のゆえに私をきらいますならば、私は喜んで彼らにきらわれます。私は今日までの経験により、教会と交わることの決して私の利益でないことを知ります。教会は幾たびか私を使いましたが、しかし、いまだかつて一回も私を助けてくれたことはありません。私は信じます、たとえ私が、キリストの聖名(みな)のゆえをもつて、私の国人に十字架に挙げらるることがありますとも、教会はその指一本を挙げて私を助けようとはしないことを。教会は常にこの世と主義方針を共にします。この世が戦争を唱えます時には熱心に戦争を唱えま

す。この世の世論は常に教会の世論であります。教会はこの世の政治家、実業家、学者らの名を借りてその事業をなさんといたします。しかして私はイエスの弟子（でし）として、教会と歩調を共にすることはできません。私はみずから欲するも教会に入りてキリストにおける私の信仰を維持することはできません。私はこの事あるをはなだ悲しみます。しかし、やむを得ません。私にとりては良心の声は教会の命（めい）よりも重くあります。

私はこの事についてなお一言言っておきます、すなわち、かつて本誌において唱えましたごとく、もし万一私が教会に入るべく余義なくせられますならば、私はローマ天主教会に入ります。私の知りまるところでは、これが地上唯一の矛盾のなき教会であります。もし地上の眼に見ゆる教会が信者各自に必要であるとならば、ローマ天主教会こそ最も完全にその必要に応ずるものであると思えます。ことに今時（いま）のローマ天主教会が昔時（むかし）のそれとは異なり、その布教にこの世の方法を用いず、この世の権勢によらざることは、注目すべき事実であります。私の見るところによりますれば、ローマ天主教会はすべての教会中最も非俗的の教会であります。

最も敬虔（けいけん）の念に富み、最も高貴なる教会であります。ただその教義に多くの解しがたいところがありますゆえに、私は今日これに入ることができないのであります。しかしながら、制度完全の点より言いまして、これにまさるの教会は、地上、他にないと思えます。

多くの点において、ローマ天主教会は最も寛大なる、最も善く人情にかないたる教会であります。今日の天主教会において、カルビン主義の新教諸教会において見るがごとき残忍冷酷なる事を見ることはありません。無教会にあらざればローマ天主教会、私の選択はただこの二ツをもつて限られてあります。しかしして私は今は前者を選むのであります。後日（あと）の事は知りません。今日はなお私は無教会信者をもつて満足するよりほかに善き道を発見するあたわざる者であります。

（一九二二年四月『聖書之研究』）
（注）内村ルツ子の死（一九二二年一月）。